

2008 年度  
宮城学院女子大学  
国際文化学科  
国内実習報告集



# 目次

1) 実習概要

2) 報告書

頁

- 3. ならまち・京町家実習報告
- 6. 京都・奈良実習「町並みの景観保存について
- 9. 若者の間における着物ブームと着物業界
- 12. 若者の間での着物ブームと着物業界衰退の裏側

大泉佳奈子

小山田陽奈

佐藤 沙織

大江 茜



## 実習概要

担当教員 : J.F.モリス

参加学生数 : 5名

### その1 事前実習

6/29 日 仙台市内の呉服店「にしむら」で和服についての聞き取り

7/12 土 仙台市内の造園業者「竜門」にて聞き取り

<http://www.ryumonen.co.jp/index.html>

### その2 京都・奈良実習

9/8 月 京都到着。地下鉄四条駅で下車、ホテルまで徒歩。後は自由時間

9/9 火 地下鉄で北大路バス・ターミナルから北1-6 仏教大学玄琢ゆき土天井町下車

バスは 9:35 発 午前 10 時にしょうざん到着 (友禅染め) 着物と着物業界について聞き取り <http://www.shozan.co.jp/shozan/>

午後 15:00 から、京都市景観・まちづくりセンターにて、京町屋と都市景観保存について聞き取り 担当 清水様 場所 地下鉄五条駅から徒歩で約 10 分

<http://machi.hitomachi-kyoto.jp/>

9/10 水 午前 10 時から 紫織庵(受付:伏見様) 中京区新町通六角上ル ホテルから徒歩

<http://www.shiorian.gr.jp/>

午後 14:00 から (財)手織技術振興財団 「織成館」 上京区浄福寺通上立売上ル大黒町 693 番地 <http://www.miyako-net.co.jp/l1/ha/orinasukan/>

9/11 木 近鉄京都駅 9:00 発 近鉄特急 9:36 近鉄奈良駅到着 1110 円 (含む特急券)

ホテルまで徒歩、荷物を預けて、ならまち振興財団まで徒歩、10:00 から「ならまち」における景観保存運動の取り組みについて聞き取り。

<http://www1.kcn.ne.jp/~narazai/>

午後:ならまち界隈を踏査して調査

9/12 金 午前 10:00 より 平城京跡についての聞き取り 案内 奈良大学文学部史学科

交通 近鉄奈良駅から西大寺駅 近鉄奈良駅から約 6 分 200 円 9:20~30 分台発 平城京跡については、次頁の URL を参照してください。

<http://www.nabunken.go.jp/site/heiyo.html>

午後 自由時間

9/13 土 自由時間

# ならまち・京町家実習報告

国際文化学科 1807227

大泉佳奈子

## 1. 問題提起と調査方法

はじめに、2008年9月8日～13日にかけて京町屋、ならまちで聞き取り調査の報告である。現在、京町屋、ならまちの古い家屋は年々減少傾向にあり、街の中心部は発展し昔ながらの面影が消えつつある。その中で日本の観光都市、奈良、京都の景観保存運動について、京都では京都市景観・まちづくりセンターの清水さんに、奈良ではならまちセンターの嶋崎さんに聞き取り調査をし、町屋の現状を視認した。

## 2. 京町家

### (1) 京町家とは

平安京の町割りを基に、中世、近世を経て完成された伝統的な都市住宅を京町家と呼ぶ。京町家の原点は平安時代だと言われているが、時代が変わるにつれ、その形や用途が変化してきた。大正末期から昭和初期に建築されたものが最後だと言われている。元来、住居と店舗との2つの機能を持っていた複合住宅であった。町家は連なり、向き合うことによって奥行きのある京都の街並みが作られていった。しかし、高度経済成長期以降、伝統的な町家は壊され、歴史的な街並みが減少していった。

### (2) 京都市景観・まちづくりセンターの役割

平成3年に京都開発が進み、歴史的な街並み・景観を守ろうと動き出した。しかし、研究機関としてではなく、景観・まちづくりのための施設としてスタート。その後、景観のための運動が増え、そして東京在住の女性からの寄付によって現在のセンターとなった。今では、市民・事業者・行政のパートナーシップで進める21世紀の京都のまちづくりの橋渡し役という基本理念を掲げ、景観まちづくりに関する啓発、情報提供、相談、学習・研修、活動支援、交流促進、調査研究を事業とし、運営している。京町家再生セミナーを開いたり、京町家に住む人からの相談の受付をしたりしている。相談は年間約300件あり、主に税金のことや、改修工事の相談だという。あくまでも「景観保存」なので、家の中はどのように改修しても良いらしく、外見は昔の街並みとして残し、中は現代風だという。

景観の情報、相談のほかに、景観重要建造物、景観重要樹木の管理、良好な景観の形成に関する調査研究なども行っている。現代に京町家を残すために、NPO 団体も協力し、保存運動に取り組んでいる。京町家は、従来の京町家とは異なり、現代に通用する町家へと変化している。町家を少し変え、weekly マンションとして貸し出しをしている。そして1年の中の1ヶ月間は助成物件として、街造りや、祭りのために使うというやり方をしているそうだ。その他にも、町家を府内の大学生が課外活動の場としても有効的に活用している。

### 3. ならまち

#### (1) ならまちとは

奈良市の市街地東部に広がる伝統建築地域であり、江戸、明治、昭和前期の町家が立ち並んでいる。もともと平城京の外京にあたる場所であり、平城京遷都以来まちづくりが始まり、商業都市へと発展し、戦後は奈良市旧市街地として栄えた。奈良市では、ならまちな歴史的な町並みをいかし、奈良にふさわしい魅力ある景観をつくり出していくために、奈良市都市景観条例に基づき、平成六年四月に「奈良町都市景観形成地区」に指定された。地区内の建造物の位置・構造・外観などについて、景観形成基準を定め、建造物の新築・改築・増築・外観の修繕・模様替え・色彩の変更などの際には基準範囲に収めなければならないようになった。現在は商業都市から観光都市へと発展しているまちである。

#### (2) ならまちセンターの役割

センターの設立目的は、奈良市都市景観条例に基づく都市景観形成地区を中心とした「ならまち」において、地域振興および伝統的文化、芸能、などの継承および、ならまち振興館、奈良市音声館などの管理運営事業を行うことで、歴史的な町並みを保存しつつ、ならまちな活性化を図り、市民文化の発展の支援をしている。

昭和63年に町並み保存補助の事業を開始し、平成元年にならまちセンターは開館した。ならまちなまちづくりは、歴史、文化、伝統を継承しつつ、暮らしやすい魅力的で活力のあるならまちをつくり上げていくことだという。①住環境の整備、②新しい文化の創造、③観光振興と地域産業の活性化の3つを基本方針とし、②と③についてはならまち振興財団が主に取り組んでいる。

伝統的な様式の建築物を保存するとともに、町並みと調和する建物にしなければならない。そのため「都市景観形成地区」の指定を行い、住民の理解と強力を得て、伝統的な町並みを活用したまちづくりを行っている。古都奈良の都市景観を守り、良好なものへと作ることが重要である。こちらも京町家と同様に、旅館やセミナーハウスとして一週間から一ヶ月の間、町家を貸し出している。ならまちは工芸をはじめ、能楽、茶道、華道という日本文化には欠かせない生活文化を育てた町でもある。国際観光都市として、奈良を訪れる人たちにこれらの文化、歴史に触れることのできるような機会を提供することを目標としているようだ。そして、観光化を契機とし、商工業が活性化し、施設が充実してきている。今後も、保存された町並みを散策し、歴史に触れてもらうことを基本とし、町のシンボルとして人と人の交流の場の役割となるよう目標を掲げている。

### 4. まとめ

京町家、ならまちは年々減少傾向にあったが、最近は国内外から注目されることが多くなり、観光客も年々増えてきているという。そのため観光業はここ数年で大分発展を遂げている。高層化が進む現代だからこそ、このような古き良きものが注目されるようになったのではないだろうか。その昔ながらの建築を残そうと、都市景観形成地区として指定された。しかし、その景観を維持するため住宅には色や、形や、高さといった規制がかけられる。観光地化することによって、制限しなければならないことが増えてくる。観光客の質もここ五、六年で変わってきており、プライバシーやゴミの問題などを抱えている。な

らまちは観光都市となっており、町家の中に入り、実際に見て回れる施設は確かにあるが、基本的には住宅地なのである。そこに観光客が入ってくればやはりプライバシーを気にしてしまう。外国の観光客がいれば、文化が違うため問題が起こるのは仕方ないことだと思う。しかし地域のため活性化し、貢献していきたいという想いもあり矛盾点がいくつかある。それを振興団体と、住民とでどうカバーして行くかが課題だと思う。

嶋崎さんがおっしゃっていたように人の想いが変わるためには、注目し、認識してもらう必要がある。文化を保存するということは大変なことである。時代が変わるにつれ、文化も変わり、使われない文化は退化してしまう。そのような日本古来の文化を京町家やならまちは残そうと活動している。古くからの町家を残したいという想いで活動し、現在のよう町家の復元に至ったのだろう。前までは、あまり「自分たちの住む町家に興味本位で入ってほしくない」という思いだったものも、観光に対して積極的になり、イベントなども行われるようになったという。今後も様々なまちづくりの計画によって活性化し、観光資源、施設も増えていくであろう。どのようなまちづくりが行われ、どのような発展を遂げるのが楽しみである。



# 京都・奈良実習「町並みの景観保存について」

国際文化学科 1807230

小山田陽奈

## 1、はじめに

これまで町並みの景観について考えたことがなかったが、今回の実習で「京都市景観・まちづくりセンター」と「ならまち振興財団」の方のお話を聞いて、京都・奈良の古い町並みを残すためには、その土地に住む人たち、および行政の大きな努力がなければ残せないことが分かった。

## 2、「京都市景観・まちづくりセンター」での聞き取り

現在、京都では京町家の数が年々減少しており、古い町並みは急速に失われつつある。京都の都市景観を特徴づけ、国際観光都市「京都」の魅力のひとつである京町家の保存が可能かどうか、そのための条件とは何か、ということ、その保存運動に取り組んでいる「京都市景観・まちづくりセンター」の清水さんにお話していただいた。

今日の京町家の原型は、江戸時代の中期に形成されたもので、瓦屋根、大戸・格子戸、出格子、虫籠窓、土壁などが特徴である。京町家は平成10年には28000件確認されたが、年々減少し古い町並みがどんどん失われていた。その減少を少しでも食い止め、京都の都市特性の更なる伸長に寄与するため、平成9年「京都市景観・まちづくりセンター」が設立された。センターが行っている事業は、景観まちづくりに関する啓発・情報提供、相談、学習・研修、活動支援、交流促進、調査研究などである。京町家に関する相談を受け付けたり、京町家所有者・居住者による集いの場を設けたりして、市民が京町家の価値を再認識、共有するよう促すような活動をしている。

平成17年、センターは「景観整備機構」に指定され、「京町家まちづくりファンド」が創設された。京都市による景観重要建造物の指定対象は、文化財や京町家がまとまって残るわずかな地区であるため、それ以外の京町家は積極的な保存がなされなかった。「京町家まちづくりファンド」が創設されたことによって、資金の裏付けがなされ、京町家の改修支援が可能になった。センターは良い京町家を改修してモデルにし、改修した京町家はイベント会場やNPOの拠点施設、祭りのため、ウィークリーマンションなどに利用している。改修といっても、元の京町家をそのまま再現するのではなく、デザインも利便性も現代風にアレンジしてある。

京町家は歴史的にとっても価値のあるものであるが、現代人にとって住みやすい物件とは言えず、建て替えてしまおうとする人が多い。これが、京町家が減少する理由のひとつであったのだが、「京町家まちづくりファンド」は京町家所有者や居住者に改修の費用を助成することで、保全を促している。費用の助成はすべてではなく、元の雰囲気を残す外観にするための改修の外観の部分だけである。自分から改修をしたいと言ってくる人もいるが、センターが外観の改修費用なら支援すると言って、京町家を残す方向へと促す場合もある。外観は町家の元の雰囲気を残すが、完全な復元は法律上不可能であるため、住居スペースは現代のスタイルになっている。

これらのセンターの活動は、京町家を改修して古い町並みを残そうというだけでなく、学生が地域の人と触れ合うなどの文化交流の場を作り出そうということでもあるという。京町家を残そうという取り組みには、観光による町おこしのねらいも大いにあったのであろうと考えられる。景観保全といっても、庭園やお寺などは市や国の管轄であるため、センターは関わっていない。

最近ではセンターの活動により、京町家の減少はだいぶ緩やかになっているという。また、すべての京町家を保存することはできないが、波及効果があるようだ。特に、商業者は、国際観光都市「京都」と盛り上げることで、積極的に改修を行っている。今後、更なる京町家保全再生のために、市民活動団体との積極的な協働がセンターの課題となっている。

### 3、「ならまち振興財団」での聞き取り

最近、「ならまち」が歴史的な町並みを失いつつある。奈良らしい風情に富んだならまちの町並み・文化・伝統を後世に守り伝えていくために、活動に取り組んでいる「ならまち振興財団」の嶋崎さんにお話をいただいた。

「ならまち」では、1979年ころから、若者が都会へ出て行くという危機感を持ち出した人々が現れた。そのような風潮の中で、平成4年、「住環境の整備」、「新しい文化の創造」、「観光振興と地域産業の活性化」をまちづくりの基本方針として、「ならまち賑わい構想」が制定され、古い歴史的な町並みを保存しつつ「ならまち」の活性化を図り、市民文化の発展に寄与することを目的として「ならまち振興財団」が設立された。「ならまち振興財団」は地域振興を目的として、奈良市の文化施設の管理運営、伝統的文化継承のための事業などを行っている。

「ならまち」とは、行政地名ではなく、奈良市都市景観条例にもとづく都市景観形成地区を中心とした伝統建築群地域である。奈良市では、奈良にふさわしい魅力ある景観を作り出していくために、奈良市都市景観条例に基づき、平成6年に「奈良町都市景観形成地区」を指定した。地区内の建造物の位置・構造・外観のデザインなどについて「景観形成基準」を定め、建物の新築・改装・増築・外観の修繕・模様替え・色彩の変更などを行う場合には「届出」の提出を求めている。形成地区の景観形成基準は、建築物・工作物のデザインなどを歴史的な景観にふさわしい、質の高いものに誘導し、歴史的環境を保全することにより、良好な住居環境の維持及び育成を図ることを基本に考えられている。この取り決めは、「ならまち賑わい構想」の活動のうちのひとつ、「住環境の整備」である。届出の内容に対しては、景観形成基準に基づき助言・指導を行うとともに、必要な助成を行っている。さらに、地区内での行為のうち景観形成を進めるのに必要と認められるものについては補助金を交付しているが、交付されるのは主に道路に面している町家だけであり、しかも外観部分の費用しか補助されない。これらは、町家を保全することに直接つながるが、ほかに間接的な活動として伝統的文化を継承・発展させていくような市の文化施設の運営も行っている。

活動の成果か、観光都市としてもならまちが注目されてきたこともあり、住民の意識は大きく変わった。最初は観光客のマナーが悪いなど反対の人々が多かったが、現在では歴史的景観を保持しているならまちに誇りを持っている人も多い。



#### 4、まとめ

今回の実習で「京都市景観・まちづくりセンター」と「ならまち振興財団」の方のお話を聞いて、古い町並みを保存するために、住民と行政の努力により、さまざまな活動がなされているということが分かった。

「町家」は町並みの景観を特徴づけるものであったにもかかわらず、市や国の保護下には置かれていないため、減少することは当然の流れであった。町家の減少に気付いた一部の人々の動きにより、センターや財団が設立され、町家が京都・奈良の都市を特徴づける魅力あるものであるという意識を市民の中で盛り上げたことが、結果、伝統的な町家の減少を少しでも緩やかにすることにつながったと言える。さらに、両団体に共通していることは、町家を保存するため修繕などに関して補助金を出しているということであった。これは、町家の保存には費用がかかること、市民は自費で町家を残すというところまでは積極的になれないということを示していると言える。

また、古い町並みを保存しようとするためには、厳しい景観基準があり、それは実生活と結びついている市民にとっては、自分の住まいの景観を自由に出来ないなど京都・奈良以外に住む人々には理解できない不便なことも存在している。私たちとしては、古い町並みに歴史的な重みを感じながら散策できればよいが、そこには実生活を営む人々とのギャップが隠れていることも忘れてはならない。実際に、道路に面した部分だけが歴史的な外観になっていて、壁の塗装の色が、道路側と面していないところで違う家があった。景観基準は市民の実生活とかけ離れたものではないだろう。

しかしながら、センターや財団の試みによって、市民が魅力のある自分たちの町に誇りを持てるようになったことは確かである。両団体の活動は、市民の意識を改革し、歴史的な町並みを残すことに成功した。これから、これらの団体による活動がどのように発展していくのか注目していきたいと思う。



## 「若者の間における着物ブームと着物業界」

国際文化学科 1807237

佐藤 沙織

### 1. 問題定義と調査方法

はじめに、2008年9月8日～13日にかけて京都で着物についての調査を行った。

私が「着物」の中で焦点を置いたのは、日本の民族衣装といえば「着物」と多くの人から認識されている中で、着物を着る機会の減少と、それに伴い着物業界の売り上げが年々減少しているという。このような状況を招いた原因は何か、また、対策として何か行っていることはあるか。さらに、現代においては、若者の雑誌などでも多く取り上げられている「着物ブーム」というものがある。この「着物ブーム」が着物業界に与える影響があるのか、客層に変化は見られるか、というテーマをもとに宮城と京都にて問屋を訪問し、聞き取りを行った。

### 2. 呉服店「にしむら」での聞き取り

2008年6月29日(日)宮城県仙台市にある呉服店「にしむら」にて聞き取りを行った。私はここを訪れる前、「着物」について調べたいと思っただけだったが、「着物」と言っても実際、何に興味があり、何について調べたいのか、といったことが明確ではなかった。そこで、実際に呉服店を訪れることでテーマを絞っていこうと考えた。「着物」を調べていく上で、興味をもったことが二つある。

その一つ目に、現代において、着物は特別な場面にしか着用することがないように思う。着物が手に入りにくい環境と、手の届きにくい価格。その原因を解決する方法として何か取り組んでいることあるのだろうか。

二つ目は、売れている着物はどのようなものか、また近年、若者の雑誌などで取り上げられている「着物ブーム」についてどう思うか。さらに、それに伴い客層に変化は見られるか。これらの二つの質問に重点をおき、にしむら呉服店での聞き取りの結果をまとめていきたいと考える。

一つ目の質問では、特別何かをしているというわけではないが、着付けのサービスを行っているという。また、着物を買っても着ていく場所がないというお客様の声に応え、お食事会への招待をしているそうだ。ここでは、お客様とのコミュニケーション、つまり信頼関係を築くことが大事であると感じた。

二つ目の質問では、どのような着物が売れているということではなく、満遍なく売れているという。にしむら呉服店の着物は、伝統を守っているだけではなく、色はモダンで古典的なものをベースに、発展、つまり現代に合ったものをプラスしたものであるという。

また、着物ブームについては、世間が「着物をはじめから現代にないもの」として見ている気がする。20年くらい前に雑誌「an・an」が取り上げたことが現在に影響したものではないだろうか。また、浴衣を短く捲り上げて着ていた時代があった。これは、歌手である浜崎あゆみやホワイトベリーらが裾を上げ、短くして着たことから流行したものではないかという。着物は以前まで(現在40代の方)は型の決まったものを着ていた時代があった。現代において、自分の好きなものを好きなように着るようになった。これを世間

でいう「着物ブーム」であり、着物を嗜む上でのメリットではないかという。

最後に、「着物ブーム」によって着物における底辺は広がったのではないか。それに伴い客層が変化したと言うことはなく、以前から 40～50 代の方が多いということである。しかし、決して経営が右肩上がりというわけではないという。

### 3. 京都呉服店での聞き取り

2008年9月9日～10日にかけて、京都にある呉服店「しょうざん」、「紫織庵」、「織成館」にて聞き取りを行った。ここでは、仙台市の呉服店「にしむら」のものと同一質問をし、聞き取りをした。

はじめに、現代において、着物は特別な場面にしか着用することがないように思う。京都の呉服店では、この原因を解決する方法として何か取り組んでいることあるのだろうか。

また、売れている着物はどのようなものか、さらに若者の雑誌などで取り上げられている「着物ブーム」についてどう思うか。それに伴い客層に変化は見られるか、について聞き取りを行った。これについて以下に述べたいと考える。

一つ目の質問では、全ての呉服店に共通して、特別何かをしているというわけではないという。しかし、お客様がいつ、どこで、どんなときに着物を着るのか考えながら、着物づくりに励んでいるのだという。また、売り上げ向上のために流行のものを真似て作るということではなく、より素材の良い物をお客様に提供したいということである。また、お店の良さを十分に理解しており、来る着物の注文はこの店で作った場合どのようなものが出来上がるか、お客様が理解しているのだという。ここには、やはりお客様との信頼関係があると感じた。

次に、売れている着物はどのようなものか、また「着物ブーム」についてどう思うか。さらに、それに伴い客層に変化は見られるか、について伺った。

ここでも共通して、どのような着物が売れているかということではなく、お客様のオーダーに沿ったものを提供しているという。また、「着物ブーム」については、現代が洋服を着る習慣ができたのではないかという。現代の若者の思いが形になったものではないかという。レトロな柄などが流行しているように、祖母の時代に流行した柄が現代の人たちに“ファッション”として合ったのではないかということである。

近年、雑誌でも多く取り上げられているのを目にするが、流行しているからといって参考にすることはないそうだ。また、雑誌に出てきたものの考え方を参考にすることはあるが、出来上がったものを真似ることはないという。

### 4. まとめ

今回、国内実習という形で宮城・京都にて、着物について聞き取りを行った。私はここを訪れる前、「着物」について調べたいと思ってはいたのだが、「着物」と言っても実際、何に興味があり、何について調べたいのか、といったことが明確ではなかった。しかし、今回実際に呉服店を訪れることで自分のテーマを明らかにすることが出来たと考える。

今回の聞き取りで、テーマの他に明らかになったことは、着物を着る上でメリットとデメリットがあるということである。テーマにも挙げた「着物ブーム」は、自分の好きなものを好きなように着るようになった。これは、着物を嗜む上でのメリットではないか。ま

た、着物は引っ掛けやすく、動きにくいという点がデメリットではないかと考える。

最後に、私たちの日常生活で洋服を着ることがあたりまえで、おしゃれを楽しんだりする。日本の民族衣装といえば「着物」という認識は普段の生活からは何うことが出来ない  
と考える。京都実習を通して着物の見方が変わったと考える。今までは、正直、着物を遠い存在に感じていた。しかし、実習を通して着物を身近に感じる事が出来たと考える。  
古典的な柄のものから、現代的な柄のものもあり、冠婚葬祭以外でも、“ファッション”  
としての楽しみ方もあること知った。今回の実習を通して、自分のテーマを明らかにする  
ことが出来たと考える。

今回の調査でご協力いただいた  
「にしむら」西村様  
「しょうぞん」新和装部門 浅井様  
「紫織庵」社長 川崎様  
「織成館」金田様、津田様  
末筆ながら謝礼の意を表します。



## 若者の間での着物ブームと着物業界衰退の裏側

国際文化学科 1807225

大江 茜

### 1、はじめに

2008年9月8日～13日、着物というテーマを元に京都にてフィールドワークを行った。私は幼い頃から着物と、着物文化が根強く残る京都という町に対して強い憧れを抱いていた。これが今回、国内実習に参加した oo 最も大きな動機である。京都でフィールドワークを行うにあたり、事前に仙台の呉服店「西村」にて調査を行った。西村さんに話を聞き、着物に対する新たな発見を見出すことができ、京都でのフィールドワークを行うという気持ちにより一層火が点いた。

元々、私は着物に囲まれた生活を送っているわけではないため、着物についての知識はほとんど無いに等しい。しかし調査を行って分かったこと、感じたことを分析し、本レポートをまとめたい。

### 2、調査内容報告

#### (1) しょうざん光悦芸術村 新和装部門にて

和洋が同じ敷地内で混ざり合う場所「しょうざん 光悦芸術村」の中にある、しょうざん新和装部門の浅井さんにお話を聞かせていただいた。中は所狭しという程に反物が置かれており、それを何本も広げて見せていただきながら、お話を聞くことが出来た。

ここで広げて見せていただいた反物のほとんどが、和という形に囚われていないものであった。というのも想像していたものより、ずっと落ち着いた色（黒、グレー、ベージュなど）、和柄とは違う近代的・洋風の柄ものが多かったのだ。パズルのピース紋様やまるでテーブルクロスのようなチェック紋様、青みがかった黒地に黄色で描かれた星座紋様など、一見和服とはミスマッチのような紋様であるのに、妙にしっくりくるのである。遠目で見るとその色も柄も特別に浮いている訳ではないのだが、近づいてみるとそのミスマッチのようでしっくりとくる紋様を確認することが出来る造りになっているのだ。このような反物が若い世代の間で人気なのだという。その理由として、以前は年齢層が高い方が子や孫に着物を買う際に、目に見えない決まりとして明るく華やかなものを選んでいた。しかし、時代が移り変わると共に洋風化が進み、きまりが薄れ、若い世代がシックなものを着ていても抵抗が無くなったことが関係しているのだという。

特に興味をそそられたのが、襟元に入れる紋である。紋といってもただ型にはめられたものではなく、様々な工夫が施されていた。あえての無地の着物に襟元一点のみに金糸で兎や猫、犬などの伝統的なものではない可愛い紋を入れ、後姿に遊びを隠すという「現代に沿った雅」の形を追求し取り入れていた。ここに職人の遊び心が隠されているのである。

話の中で浅井さんが「知人のパーティーなどの堅苦しくない席に着物で出席しようと思っても、がちがちの型にはめられた着物だと洋風の中で妙に浮いてしまうでしょう。着物をおしゃれとして着るのならばその中でも変に浮くのではなく、いい意味で目立てるものを着たいと思いますよね。もちろんただ着たからいいという訳ではなく、写真を撮る際に

も隣の人の衣服との色あわせ、背景との色あわせを考えるとこのものも大切なことなのですよ。」と仰っていたことに納得させられたと同時に、着物の奥深さを再認識させられた。

## (2) 紫織庵にて

京都市指定有形文化財にも指定されている「紫織庵」では、社長である川崎さんにお話を聞くことができた。紫織庵は大正期のデザインを復元した長襦袢の販売元として有名である。長襦袢といえば、単調な薄いピンク色のものが当たり前のように思える。しかしこれは戦後に作られた考えであり、戦前はとても美しいものであった。大正・昭和の初めまでの50年間は華やかで個性的な長襦袢の全盛期であり、当時の西洋に対する憧れが現れている新美術デザインであった。しかし戦後になると、実用性を重視しピンクのぼかし襦袢が定着してしまったのである。実際、長襦袢は着物の中に着るものであり外見上見えるものではない。しかし紫織庵では、目に見えない美しさ・粋なお洒落を提供したいと考え、戦前の形に戻したのだという。

お話を聞く中で、現在の着物業界の衰退についてとても興味深いことを聞くことができた。一つ目が、着物の流通についてである。着物が私たちのもつに流れるまでには基本的に問屋を介する。制作卸（メーカー）から前売問屋・地方問屋にいき、そこから小売店やデパートを介して私たちが買うのである。しかし問屋から問屋へと流れれば、その分経費の関係で着物自体の値段が上がるのである。これを繰り返すことで値段が上がり、私たちの手に届くところになるととてつもない値段になってしまうのだ。この消費者より儲けを重視するという流通の形が原因なのだという。二つ目は現在の着物の着方に問題があるというものだ。洋服での生活に慣れてしまった現在の生活で、着物を着る機会といえば成人式や結婚式、お葬式などの「正装」としての場だけである。そのため着付けてもらうにしても、襟元がきちんとして、着崩れないようにきつい着方にされてしまう。その為、着物＝大変という気持ちになってしまい着物離れを起こしてしまうことにつながってしまうのだ。本来着物は普段着であり、ゆとりをもった着方が主流であった。

## (3) 織成館にて

「織成館」では西陣織についての調査を行った。西陣織とは、あらかじめ必要な色に染色した糸を用いて、紋様を織り出すというものである。お話を聞かせていただくことになっていた金田さんのご好意により、直接帯を織っている工場を見学させていただくことになった。工場には多くの手織機があり、職人さんの手によって、色彩豊かな糸が西陣独特の手織機から響く音と共に帯に紋様を創り出していた。私たちは伝統工芸士である津田さんの横で、直接作業を見ながらお話を聞くことが出来た。何度と無く繰り返される同じ動きは、単調であるがゆえにとっても気の遠くなるような作業である。現在は機械技術が発達しているため、手織りでなくとも帯に紋様を入れることが出来るそうである。しかし、手織りと機械織では同じ帯を作っても大きな差が出る。見た目は差ほど変わらないが、機械織で織られた帯は重く、しわになりやすく直りにくい。一方手織りで織られた帯は軽く、しわが出来ても手で挟み叩くだけで元に戻る。機械織のほうが断然楽であるのに対し、手織りを貫くという姿勢に職人のこだわりを感じた。

### 3、見解

着物についての基礎知識がなく、まったくの素人である私が今回のフィールドワークを行い、着物に対する見解を改めたのは言うまでもない。生活が洋風化し、着物に触れる機会が減り、かわりに洋服での生活が当たり前となっている。着物は洋服と違い動きづらく、普段の私たちの生活には適さない。しかし、着物や帯に隠された職人さんの想いや遊び心は、洋服ではなかなか表現できないものである。

また今回学んだことで特に驚かされたことは、時代が変わるにつれ着物も変わってきているということだ。儀式的な意味や古い考えの中での形でだけではなく、私たちのライフスタイルに合った形を提供した結果、年齢を問わず買い求めやすくなり若者の着物ブームに繋がったのだと思う。決まりきった柄・色、また着方を見直すことで、着物のほうが洋服より自由な衣服に成りえるのだと感じた。この考えが、今後多くの人々の着物に対する考え方を改めるきっかけとなり、より着物を着やすい環境作りに繋がることになるだろうと思う。

調査にご協力いただいた  
「しょうざん」新和装部門浅井様、  
「紫織庵」社長川崎様、  
「織成館」金田様、津田様  
末筆ながら謝礼の意を表します

